黒髭サンタ

御神楽

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
黒髭サンタ

【Ｎコード】
Ｎ２５７７ＢＡ

【作者名】
御神楽

【あらすじ】
自作短編小説です。他サイトにも投稿しております。

私はしがない、どこでもいるサラリーマンでございます。

役職もたかだか係長の極普通の会社員。そんな私にも妻子がいます。

自ら言うのも気が引けるのですが、しかし、身内贔屓を差し引いても才色兼備の良く出来た妻で。

娘もとても可愛く、頭のいい子です。私には似ても似つかない、とよく言われるのですがそれもその筈でございます。

娘は妻の連れ子であって、私との血の繋がりは全くないのです。そうです、妻は離婚経験アリ。今風で言う、バツイチというものなのです。

けれど、そんなことなど私は気にも留めていません。私は妻子を溺

愛している、と明言できるほどに愛しております。

さて、今日は結婚してから初めてのクリスマス。

娘とはそれなりに友好な関係を築いていますが、この機会を機により仲良くなりたいを画策しているわけでございます。娘は数えで七歳。

未だサンタの存在を信じて止まない年頃です。その為、平凡。今風で言うならベタな提案ではありますが、私がサンタに扮して、娘の枕元にプレゼントを置こうと思っております。

その際、故意に物音を発て娘を起こし、サンタが本当にいるという夢を与えてあげたい。そう思う次第でございます。

そして、今。午前二時。

初めてする仮装に手をこまねいていると、気付けば既に丑の刻。

私は妻も寝静まった後、物音を発てない様、こそこそと娘の部屋まで向かいました。

しかし、さて。その時、不意に気付いたのです。娘の部屋から聞こえる物音に。

物音と言っても決して大きなものではなく、こそこそというまるで今の私のような最低限の物音なのです。

となれば、娘が起きているわけではなさそうです。――刹那。私の脳裏に最悪の可能性が過ぎりました。

考えうるのは、物取り。古今でも名称は変わらない、泥棒という輩ではないのか。

昨今、巷で騒がれている幼年者に発情する変質者。今風で言うロリコンという人間がいるらしいですし。

娘の着衣などをねらってるのやもしれません。いえ、それとも娘自身を狙った犯行やもしれません。

娘にその毒牙が・・・。そう考えるともう気が気ではありません。
私は意を決し、娘の部屋に進入しました。

入った娘の部屋で視界に飛び込んできたのは、未だ眠っている娘とその横に佇む背の高い男。

部屋は物色された様子はなく、娘も危害に遭った様子はありません。
しかし、娘の部屋に見たことのない男がいるのは事実。

私は声を発しました。男は敏感に私の声に反応し、振り向きます。
そして、その男の顔を私は見ました。

顔は長く馬顔、肌は白く、しかし、その白さに反して真っ黒に茂る顎鬚。歳で言えば私よりも上だと感じます。

私を見た男の表情は、決して驚いて狼狽するような風ではなく、どこか落胆するようにため息を吐いたようでした。

私が男の顔を認識した次の瞬間、男は脱兎の如く駆け出し、部屋の窓から飛び出しました。・・・私は追うことができませんでした。

その一連の動きはとても華麗で。運動神経に乏しい私にはとてもマネできないものだったからです。しかし、それ以上に私達家族の住むここはマンションの四階。

その高さから飛び降りて無事で済むとは思えません。正直、私は男は死んだと思いました。だからこそ、私は追えなかったのです。

男を追わなかった私は急いで娘を起こしました。先程の男に何かされていないか、そのことに頭がいっぱいでした。

娘は唸りながら起きて、私を見ました。そして第一声として「わ、サンタさん・・・？」と呟きます。そうでした。私は今サンタなのでした。

けれど、この場合は仕方ありません。私は潔く正体を明かし、娘が無事かを問いました。娘は酷くがっかりした様子でしたが、続いて自分はなんともないと告げました。

そのことに安堵すると、娘が突然言いました。枕元に置いてある小瓶を指差して「これ、クリスマスプレゼント？」と。

お世辞にも綺麗とは言えない巻き方で、リボンに包まれたそれ。しかし、私は小首を傾げます。私はまだ枕元にプレゼント置いていません。

そもそもプレゼントは小瓶ではなく、ぬいぐるみでした。ならば、その小瓶が娘の物でないとするならば一体誰のプレゼントなのでしょう。

私が考察していると娘は大はしゃぎの様子で、とても喜んでいました。私にお礼を言って、笑顔を向けています。どうやら私からのプレゼントだと思っているのでしょう。

小瓶の中はキラキラと輝いていて、なにやら光物が複数混在しているようでした。それを眺め、娘は喜びます。それで私はもう、自分のプレゼントをあげることは出来ませんでした。

ともあれ、娘が無事であることを確認した私は娘を寝かせ付けました。被害がなかったけれど、やはり無視することは出来ないのでこれから妻と相談して警察に連絡しようと思います。

私は最後に娘の部屋の窓から下を確認しました。しかし、そこには何もありません。血の跡も、着地した痕跡も何もかもありませんでした。

そんな筈はない、と思う反面。私にはどうしてか納得できた気がしました。

部屋を移し、私と妻の寝室。

私はすぐさま妻を起こし、先の事を告げました。

妻は衝撃を受けると共に、娘の無事を知らせるととても安堵したように息を吐きました。そして、最後。自分には見知らぬプレゼントが在った事を知らせると。

妻の表情が変わりました。『綺麗な光物が入った小瓶』。その単語に反応して、妻は私に問います。妻の質問。それは男のことでした。

どんな容姿だったか、と聞かれ。私は戸惑いつつも答えました。私の答えを聞き終えた妻は力なくその場に座り込み、静かに涙を流し始めました。

私はひどく狼狽しました。なぜ妻が泣いているのか、なぜ妻が男のことをきいたのか。私には皆目検討もつきませんでした。

しかして、その後。妻は説明をしてくれました。

それは別れた前夫の事でした。妻の前の夫はとある企業を立ち上げた企業家だったそうです。

経営も順調。忙しい日々で家族で過ごす時間は少なかったそうですが、順風満帆の幸せな家庭を築けていたそうです。

しかし、その夫はとても人が良く。時には甘すぎるように思えることが多々あったようです。そして、一人の友人の保証人になった結果。

莫大な借金を残し、その友人は失踪。会社も、家も、何もかもを失い。その借金だけは返済したそうです。その後の苦しい生活を申し訳なく思った夫は妻と離婚。

その離婚の直後。事故に遭い、他界したそうです。その前夫の特徴が背が高く、顔は長く、肌は白く、それに反した真っ黒の顎鬚。

そして、光物の入った小瓶。これは生前。前夫が娘にねだられていた、事故の際紛失したお守りだったと妻は話してくれました。

私はそれを聞き、「あぁ・・・」と呟きました。

まるで何かに納得したように、心の中がすっきりとした気分です。

それから私達は、何も言いませんでした。唯一つ、暗黙の認識で警察に通報する必要はないと思いながら。

・　・　・　・　・

私達家族はサンタを信じています。

しかして、それは世間一般でいう恰幅の良い赤い服の、白い髭を生やした男ではなく。

背の高い、肌が白く、馬顔の、真っ黒な髭を生やしたサンタ。――

――私の家族だけの黒髭サンタ。

さて、さて。遅くなりましたがメリークリスマス。貴方様にも、聖夜の奇蹟があらんことを・・・。

fin

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n2577ba/

黒髭サンタ

2012年1月6日16時48分発行